

内閣総理大臣・安倍晋三 様

抗議声明

私たちは、安保法制を認めない！それに従わない！

安全保障関連法案の衆議院通過に、抜き差しならない危機感を抱いた人々が、それからというもの、どれほど真剣に、魂の底から反対を叫んで来たことでしょうか。あらためて日本国憲法を読み、主体的に、意志的に、街頭に繰り出し、あるいは自分の持ち場で祈り、声をあげ、つながり、反対の意思を表してきたことでしょうか。戦争経験者も、学生も、宗教者も、学者も、子どもを育てる親たちも、保守・革新を超えた政治家たちも、どれほど多くの人々が、心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくし、歴史に聴き、経験を注ぎ、未来への責任を負うて、安保法制の違憲性と危険性を訴えてきたことでしょうか。

そのような誠実な人間たちの、国民世論とさえ言えるほどに高まった思いと行動とを、安倍内閣は一顧だにせず、「戦争ができることが安全保障」という自らがしがみついていた結論にひたすら執着しました。その姿は、立憲主義への挑戦、民主主義への侮辱、歴史の教訓への反逆、日本国憲法の蹂躪という、愚かで浅はかな姿でした。

私たちは、歴史に学ばない政治はいりません。人の苦しみ・悲しみを理解できない政治はいりません。対話ではなく暴力に依存する政治はいりません。人間の命の重さを感じられない政治はいりません。そのような政治に、命を育み、人の世をつくる力などありはしないことを、私たちは知っています。

私たちは確信します。

安倍内閣の暴挙・安保法制の国会決議を、やがて、必ず、歴史が裁く、と。

私たちは確信します。

民意を嘲って成立した安保法制を、やがて、必ず、民衆が裁く、と。

そして、私たちは確信します。

平和をはき違えた安保法制は、すでに、平和の主イエス・キリストによって、無力にされている、と。

安全保障関連法案の決議強行。それは、あたかも立憲主義と民主主義の葬りに見えます。しかし、そうではありません。いまや、民衆一人ひとりが、自らが主権者であることに気づかされ、自らのことばと行動を立ち上げ、表現し、誰もが主体的かつ責任的に、自立的かつ連帯的に生きるべきことを知らされた黎明の時です。まさしく、この日、平和への新たな道のりが始まったのです。私たちは、復活の光に照らされて、この暗闇の中を希望をもって生きるのです。

私たちは、平和の主、イエス・キリストの名によって、

この安保法制を認めません。

この安保法制に従いません。

いかなる理由によって戦争がなされようとしても、

いかなる理由によっても協力しません。

私たちは、戦争そのものを認めません。

したがって、私たちは、あらゆる戦争のための備えに反対します。

私たちは、この安保法制が必ず跡形もなく消え去る日の訪れを信じ、祈り、これからも行動します

2015年9月17日

日本バプテスト連盟理事会